



19 松井昇

《かたみ》

一面

明治二十八年(一九〇五)

油彩、カンヴァス

一一二・二×八八・〇

東京府 第二部第十八類

第四回内国博は日清戦争の終結とともににはじまった博覧会であった。戦勝気分にかく国内の状況にこたえるかのように、内国博に関連する言論にも、初の対外戦争を終えた高揚感やナショナリズムを鼓舞するかのような言辞が随所にみられた。また、絵画の出品作のなかには、戦争を描いた作品もあった。直接的に戦場を描いた作品もあれば、本作のように戦争の結果としてたらされた社会世相を描いた作品もあった。《かたみ》は、戦死した兵士の遺品の前に、悲嘆にくれる遺族の様子を描いている。ひとときわ華やかさを感じさせる娘の着物は日本の勝利を連想させるが、目頭を押さえる娘の仕草から、その勝利には大きな代償がともなったことを暗示している。画面の隅にむなしく放り出された日の丸の小旗とらっぱは、戦時中の熱狂から一転して、急速に冷めつつあった国民感情をいくぶんかあらわしたものである。抑制された描写によって、安易な戦争賛美におちいることなく、批判的なまなざしをのびせた作品である。本作とともに出品された《柳塘春色》に褒状が受与された。

松井昇(一八五四―一九三三)は但馬国(兵庫県)に生まれ、明治維新後に上京し、川上冬屋の聴香読画館で絵を学んだ。その後、浅井忠らの十一会に参加し、明治二十二年には明治美術会創立の発起人となり、同会を中心に活動した。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勸業博覧会 ― 明治美術の幕開け

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 57

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年四月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections